

# 「加害」の記録 後世に

## 父の遺志 語り継ぐ

戦場での加害体験をつづった記録の出版から31年。著者が亡くなった後も、息子がその体験を語り継ぐ。

### 戦争を伝える

本武さんは本の出版前年に70歳で亡くなった。加害の体験を率直につづったことから反響を呼び、2001年に再版された。

1990年に自費出版された「一兵士の従軍記録」。

日中戦争で鯖江市の歩兵第36連隊から中国大陸に出征し、その時の陣中日記をもとにした記録だ。著者の山



「一兵士の従軍記録」の出版に向けて託された原稿の用紙の厚さを説明する稲木信夫さん＝福井市菅谷1丁目



戦地の様子を記録した父・山本武さんの陣中日記が書かれた手帳を見る五男の敏雄さん＝鯖江市西山町

岸の周囲に並んだ遺体が、今も脳裏に焼き付く。

その稲木さんは初版のあとがきで、1938(昭和13)年5月20日の「陣中日記」に触れた。

「中隊長命により、良民と言へども、女も子供も片端から突き殺す。惨酷の極みなり。一度に五十人、六十人、可愛い娘、無邪気な子供、泣き叫び手を合せる。此んな無惨なやり方は生まれて始めてだ。ああ戦争はいやだ」

上司の命令で、一般住民を皆殺しにした内容だ。ただ、本の中で同じ日のことを記した部分に、そうした悲惨な記載はない。日記で書いたことをそのまま載せられなかった思いの複雑さを、稲木さんは推し量る。だから、「あえて(あとがきで)紹介した」と話す。

五男の鯖江市議、敏雄さん(67)にとつての父・武さんの姿は温厚なものだった。手を上げられた記憶もなく、公民館長を務め、地域の人たちからの人望も厚い自慢の父だった。加害に関わる重い体験を

語り始めたのは還暦を過ぎた頃だ。農閑期になると毎晩、日記が書かれた手帳を片手に「従軍記録」を書きためた。「戦友のうめき声や鉄砲の音がよみがえる」と、頭を抱える姿も見た。

「二度と戦争をしてはけけない」。それが父の口癖だったことを、今もよく覚えていた。死後、陣中日記の中に一般住民を殺害した記述があることを知り、ショックを受けた。

「自分の意思に反し、加害者にさせられることもありつら」ということを伝えた。思いもあって、記録に残したのでは。敏雄さんは父の思いをそう読み取る。そして今、その記録をもとに講演会などで、父の戦争体験を伝えている。

(山本潤子)